うそと真実の弁証法

近藤良樹

1. うその構造

うそは、真実と対立する。だが、うそは、「真理」や「本当」「事実」「正しい」というようなことばとも対立する。「それは、本当ではない、うそだ」「事実ではない、うそだ」「正しくない、うそだ」という。真実や真理、本当・正しい等は、それの指示する対象・事柄を前提にして、これに主観の表象が「一致」していることを各様にさすのであろう(真理と真実のちがいについては、拙稿「情報倫理は、「真実」を守る倫理である一真理と真実一」(『倫理学研究』2000年6月広島大学倫理学研究会)を参照ください)。うそは、その反対で、「不一致」一般をいうのである。だが、不一致ということならば、「誤り」(「間違い」「誤謬」)も、そうであろう。事実でないもの、本当・真理・真実でないものは、また、「誤り」でもあろう。

では、この「不一致」一般としての誤りと、うそは、どうちがうのであろうか。「うそ」は、「つく」もので、「誤り」は、たまたま「おかす」もの、思いがけず「おちいる」ものである。あやまり(それの指示する対象への表象の不一致)は、意図しないものであり、できるなら元の対象に一致して真理・本当となろうとつとめているところで、真理への意図に反して、はずれてしまい、不一致になった、誤ってしまったということであろう。これに対して、うそ・虚偽は、自らが意図して、故意にこれを「つく」「かたる」のである。うそつきは、真理・真実が知られては自分の都合に悪い、不利益だというようなことがあって、不一致の誤り・間違い(とうそつきのみなしているもの)をふまえて、これを一致の真実にすりかえて、あたかも真実であるかのように相手に受け入れさせていこうとするものである。故意に不一致の状態を創作するのである。うそ・虚偽は、自らの意志において、不一致を求め、これをかたって人をだまそうという、故意の、倫理的な悪の世界に属するものとなる。間違い・誤謬は、たまたまそうなるだけで、認識論的な世界に属する問題である。誤った者が本来求めているのは、つねに一致・真理の方であって、不一致は、自らの求め意図的に創作したものではなく、過失として生じているものにすぎない。

うそ・虚偽の方のみが、故意のものとなり、意志に属するもので倫理的なものになるのだが、ときには、「うそ」は、故意ではなく、単なる「誤り」と思われるものについてもいうことがある。「うそ字」という場合の「うそ」は、故意にしたものではなかろう。誤っている、間違っているというだけのことのように思われる。うそは、非真実・非真理としての「誤り」「間違い」を知っていて、これを故意に真理・真実といつわるものである。その点からいうと、「うそ字」は、真なるものを故意に隠し、いつわっているのではない。また、「いま行かないのは、うそだ」というような場合の「うそ」も、故意にする虚偽だというのではなく、単に「不適当」「不適切」というだけで、一般的な規範から見て、これに一致していない、誤っているというだけのことであるように思われる。

しかし、そうであれば、「うそ字」といわず、「誤字」といえばいいのだし、「いまいかないのは、誤っている」といえばいいのである。そういわず、「うそ」だというのは、単なる誤謬・不一致とはちがうものをそこに意味しようということがあるのではないか。つまり、意図的な、故意のうそにかかわるものがそこにもあるのではないか。「うそ字」だというときは、単なる誤字とちがい、無自覚ではなく、その字を知らないのではあるが、故意にする「あて字」と似ていて、まちがいを自覚していて、半ば、意図して、「ごまかした」「だました」のだろうという意志の関

与をそこに込めようとしている場合があるのではないか。また、ときには、相手の知性を尊敬していて、無知からする誤りではなく、知っているのにわざとふざけて、あるいはユーモアで間違った文字を書いているのであろうと、敬意を表し「故意」と受取っていることを示す場合もありそうである。多くの場合は、不注意とかルーズという、本来なら間違いをさけるようにと細心の注意をしておくべきところなのに、安易にかまえていてと、注意不足を問題にし、それらのことをこめて、「うそ」字だといっているのではないか。あるいは、「行かないのは、うそだ」というのは、それは、「間違っている」というだけのことではなく、「行かないんだと？ まさか、うそだろう」「だましているんだろう？ 行けよ」ということであり、「だます」という、ただし、しばしば明るいというか悪意のない、意志・故意の感じられるようなところがあるのではないか。

道をたずねられて、「山田ビルの左隣りです」といったが、本当は「右隣り」だったというとき、「あ、まちがっていました、あやまりです、うそいってごめんなさい」という。ここでは、間違い・誤りとうそは同じで、そこには、故意はない。しかし、これについても、意志の介在・故意のかげは見い出されるのではないか。ここでの「うそ」という表現は、「だましたようになって、いつわったかのようになって」と謙譲の表現として成立しているのではないか。不注意で、配慮にかけていて、故意ではないけれど、「だます」のではないが、意志散漫で、意志の不適切さがあったのだ、故意のうそに準じていると、引き下がり、卑下しているのではないか。また、誤りをいわれた方はというと、被害者意識をもつような場合、故意ではなくても、なんとなくうらに故意が感じられ、したがって、強く非難したい気持ちからいうと、曲解なのかもしれないけれども、「だましている、うそをついているのではないか」と、「うそ」めいたものを感じがちだということなのであろう。話し手からは、単なる誤りであるとしても、受け手、被害者の方では、深刻な問題となるのであり、ひょっとしたら、「わざと」そうしたのではないか、故意に近いのではないかと受け取って、故意にする「うそ」と形容したくなることもあるのである。

だとしたら、「うそ」は、典型的なうそ、つまり、意識的に故意にだまし、いつわる、「虚偽」といわれるようなものと、それに準じた、(被害者意識からたぶんに曲解し悪くとる場合に典型的にそうだが、故意ではないのに、あたかも、だます意志があるかのような)たんなる「誤り」とからなるといってよいのであろう。

ところで、「うそ」は、うそ・虚偽として相手に捉えられたのでは、うその意味はなくなってしまい、うそは成立しない。真実でないもの、本当ではないものを、真実・本当として受け入れさせるところに、うそはうそとして成立する。つまりは、うそは、何といっても、それが真実・本当・事実として相手から受け取られねばならない。うそは、うその姿をとらない、あくまでも真実のすがたをしてあらわれるのである。真実は、うそなくして成立するが、うそは、その存立自体が弁証法的で、真実なくしては、成立しえない。　　うそをつくものは、うそそのものを創造することにではなく(うその内容そのものは、はじめにすでに存在しているのがふつうである)、うそを真実・本当と受け取らせるための工夫に力を注ぐことになる。事実・真実であることをよそおうために、まずは、諸事実をふまえて、それに依拠しようとする。さらに、感覚や知性の錯覚・誤った先入見を利用し、論理的な飛躍や曖昧さ・誤りをたくみにごまかして、あるいは権威をもちだし、相手をうその方にと導いて、これを真実として受入れさせていく。自然な展開をよそおい、しつこく反復して相手の抵抗をくじいて受け入れやすくし、あるいは、他の人や他の情報源からも同じうそを導き出すなどして、手を変え、品をかえて、うそを本当らしく見せかけていくのである。

根本的には、うそをつく者は、相手から信用されているのでなくてはならない。そのうそを真実と信用させるために、錯覚などを利用するが、それは、結局は信ぴょう性・信用性を増すためにそうされるのである。本当だと信じて受け入れてくれるようにしむけていくのである。信用できない者・うそつきというレッテルを貼られた者は、うそをつくことができなくなる。かれのいう「真実」は、常に「うそ」なのだと相手は考えてしまう。信用できる人であったら、その真実といわれるものが疑問に感じられたとしても、それを真実として信用することであろう。うそを真実として受け入れてもらうには、とにかく、根底において、信用できるということがなくてはならない。疑いを取り除いて、まちがいないことを反復して示して、信用できるのだと相手に思わせて、「真実だといっているが、うそのように思われる、しかし、人間的に信用できるから、真実だと信用しよう」と受入れられていくようにと、うそつきは、努力するのである。

われわれは、通常、さまざまな信頼・信用を前提にして関係をもっている。それをやぶるような事は、通常はしないという前提をもって付き合いをしている。だが、うそつきは、この信頼関係を利用し、それを守るようによそおいつつ、これをやぶるのである。『イソップ』に「おおかみが来た」とうそをいう羊飼いの話があるが、村びとは、本当に狼があらわれて危機的なときにのみそう言うものと信用し、前提している。それをうらぎって、うそをいうわけだが、信用が残っているかぎりは、これにだまされる。だが、うそをついて信頼を裏切っていると、もはや、信頼・信用そのものを失うから、うそをついても、だれも駆けつけてこなくなる。うそは、信用を失うと、もはや、通用せず成立不可能となる。うそつきは、なお残っている信頼・信用関係を利用して、あるいは、当然のこととして疑われないような大前提を利用して、ひとをだましていく。そのたびに、信用を損ない、大前提となっているものも、かれの前では疑わねばならないものとなって、かれは、うそをつくたびに、共通のきずなを失っていき孤立していくのである。

2. うそは、たまにつくものである

うそをつく者は、常に一貫して嘘つきであるわけではない。典型的には、自分の利害のからむところで、これを有利に導くために、ひとが情報によって動く事を利用して、故意に誤ったうその情報を与えようとするものになる。その場合、かれ自身は、そのうそをうそと心得ていて、真実は、別のところにあることを周知しているのがふつうである。日常生活のなかでは、かれもひとの信用をふまえ、信用をうらぎらないように生活している。なにからなにまで、うそで塗りかためているわけではない。肝心の利害にふれるところで、かれは、ひとのつかわない、卑怯な武器を一方的に使用するのである。しかし、だまされる方は、これにもなれてしまって、「肝心なときに、かれは、裏切る」ということを知ることになり、そういう構えをもてるから、被害は、いつまでも繰り返されるものではない。ただ、日頃は、信用しあった関係のもとで、うそをつかずにかかわっているから、「肝心なときには、うそをつくやつなのだ」ということをつい忘れてしまい、時に裏切られてほぞをかむことになるのである。

しかし、肝心なときに、うそをついて裏切るから、しだいに世間がせまくなり、匿名で生きる都会でも同一のところでは、生きにくくなって、かれは、自身のうそでよごれていない新天地へとひっこしていく。かれがそこで快適に優位をたもって生活できるのは、うそが真実とうけいれられるはじめの間だけであり、うそがうそと見なされるようになると、その卑怯な武器は、用をなさなくなり、かつ人間関係の根本をなす信頼・信用を失っているので、身からでたさびとはいえ、非常に生活しにくくなる。信用されている他の人はチェックされないのに、彼のみはチェッ

クされ、「うそ」でないことの保障のために担保を用意しなくてはならないし、しばしばそういう交わりそのものを断られてしまうのである。

嘘つきは、多彩であって、常に肝心なところでうそをつき裏切る邪悪な存在から、さして、悪意はなくたんにルーズでちゃらんぽらんないい加減なひとまである。しかし、いずれにしても、ふつうには、かれらは、自身がうそをついていることは自覚している。うそつきだということでの何らかの後ろめたさをもっている。うそをつきながら、自身をうそつきと自覚しない病的な場合もあるようだが、ふつうには、真実がほかのところにあって、それを知りつつ、そうではないものを真実と表明するのであるから、なんらかのかたちでのうその自覚があるというべきであろう。

しかし、当人がうそと思っていないのみか真実そのものと考えているような、したがって、当然、正々堂々とうそをつくというような場合もまた、存在する。かれは、隠されていた真実を暴露して役に立とうという、善意志をもっているのであり、そのうその与える影響力は、うそつきの比ではない。このうそは、当人にくみしていうと、「うそ」ではなく、うそを意図しないものとして、「誤り」「誤謬」に属するものである。だが、その影響力・被害を被るものが大きければ、それを安易に表明していくことは、不注意で慎重さに欠けているものとして、被害者からは、ひとをまよわしだましているのと同様なものと見なされ、「うそ」を言っているということになる。

対立する宗教においては、一方の主張する真実は、他方からは、単なる誤りではなく、うそとみなされることが多い。友好的な関係のもとでの対立なら「誤りにおちいっている」といわれるものでも、その対立が激しい場合、「うそ」といわれるようになる。つまり、単に思慮・考えが浅くて不注意の「誤り」になっているというのではなく、自分たちの真実に敵対してこれを妨害しようという悪魔的なしわざとみなされて、邪悪な意志でもって、真実を破壊しようとしているということで、故意にする「うそ」と断定されるのである。

真実ともうそとも判別がつきかね、真偽の決着の容易にはつけられないようなものの場合、そこで敵対し争われることになると、一方からいうと、「真実」であり、それは、他方からは、「うそ」ということになっていく。それを主張するひと自身は、自身を真実のひとと意識し、誇らしく、それを主張しつづけるが、それに反対のひとからは、かれは、うそをかたりつづけているということになる。ただし、真実を求めてのことであれば、その一点の汚点を除いては、かれは、決してうそつきではなく、真実のひとであることを、対立する者の方でもみとめることができよう。かれは、他のことがらでは、真実のひとなのだから、信用があり、影響力は、うそつきとちがって、大きくなる。宗教的な真実は、だいたいが、それの信仰者以外からいうと、「うそ」になる。キリスト教の唯一の神の存在は、キリスト教徒には、最高最大の真実であろうが、仏教徒にいわせるならば、そんな神の存在の主張など「おおうそ」ということになる。その評価についての落差は、おおきい。それが、「うそ」だとしても、うそつきのうそとちがい、これを主張する者は、最高の真実の語り手と自覚して堂々としており、受け取るものも、なんの疑念もなく確信しているから、うそは、大きな効果を発揮しつづけることになる。その真実がこの世界のうちでのことであれば、いずれは、うそと判明していくことになり、それについての「うそ」は、本来まじめな真実のひとのものであれば、自身において悔い改められることになる。しかし、それがこの世界を越えたものの場合、なかなかうそと判別されることはない。

3. なぜ、うそをいうのか

われわれは、行動をおこすとき、その行動の対象となるものについての情報をあつめ、その肝心要めの事柄、つまり、真実を把握し、これをふまえ対応していこうとする。これは、動物などでも、同様であろう。えものをねらうとき、ライオンは、その動物が弱っているとか、たべられるものであるとかの情報をふまえて、その真実にしたがって、行動を起こす。ねらわれる動物の方も、状況の仮象にまどわされることなく真実を把握して、危険を察知すると遁走の態勢をととのえる。ねらわれる方は、できるだけ、弱肉の身の真実を知られないようにと、身をカモフラージュして、だまそうとし、ねらう方も、ねらってはいないかのように、また、近づいていることを隠して、お互いにだまそうと懸命になる。

ひとになると、これを言語によってさらに一層たくみにしていく。相互に真実を隠して、自分に都合のよいようにともっていくために、反真実・うそをついて、だますのである。うそをつく場合、ふつうは、自らはそれを反真実・虚偽と知っている。相手に真実としてこれを受入れさせることができるならば、うその誤った方向に向わせることができ、自分のみが真実の方向に向うことで有利な展開をすることができるのである。しかも、そのような、うそをつくという汚い手は、信頼できる人間関係を形成しているものにおいては、使わないのに、当人だけがそれを使用するのであるから、一方的に有利にことをはこべ、真偽がそこで果たすものが大きければ大きいほどに、その効果は大きくなる。

ひとは、動物でもそうだが、あるがままを相手に示すことは、かならずしもしない。自分を強く、高貴にみせかける方がよいならば、「虚飾」といううそをもってする。戦いに際しては、威嚇し大きく強く見せようとする。あるいは、逆に、えものになることを避けようと、小動物は木石化(擬死)してみたり、嫌悪させるような悪臭などをだす。ひとも、そうである。虚飾と卑下のふたつの両極端のうそをもって、ひとをあざむこうとする。真実は、本当の姿は、虚飾(alazoneia)と卑下卑小(eirohneia)の中間にあるというのが、中庸を徳とみるアリストテレスの「真実(alehtheia)」の捉え方にあるが(アリストテレス『ニコマコス倫理学』ベルリンアカデミー版1108a)、反真実の両極端のあいだに、自分の一層の利益のためにいずれかにとゆれ動きながら、確かに、うそのない真実というものが中間に存在している。

真実は、かならずしも、簡単に見えるものとはなっていないから、そのままにしておいても、周囲の者に分からないままになることもある。しかし、見る眼があれば、隠さないかぎり、見られる可能性があり、見られたくなければ、これは、隠す必要がでてくる。真実の情報に相当するだけのものがあてがわれるのでなくては、見たいもののこころを満たすことはできない。いわば、その覆いがうそである。うそは、真実として相手に受入れられるのであり、真実に相当する内容をもっているのである。うそは、真実のはいるはずの場所に入れられた反真実であり、真実にとってかわっているのであり、真実を積極的に隠すものとして利用される。

うそは、それまでのうそや不首尾をとりつくろうために、自身の知られてはこまる行状をかくすためにも使われる。自己保護のために、うそにうそを重ねるのである。真実・事実に基づいているひとは、いかにつつかれようとも、それが真実であれば、まようことはないし、人からつつかれても事実に基づいている限り、つつかれるほどに一層確信の度合いを高めてくれることになって、「うそつき」へとさそわれることはあまりない。だが、うそは、真実・事実をはなれているので、つつかれて、うそのばれるような事実がつきつけられると、それへの弁明に窮することになりがちで、これを弁明し切るには、さらに別のうそをもってするということに、うその上塗りをしがちとなる。うそであるという批判に対して、どこまでも、うそで塗り固めていくことに

なるが、反論できない(もちろん、うそなのだから、真実との証明はできないわけだが)ところへもっていくことで一応の決着をみることになる。そこまでもっていけると、「あとは、信じるかどうかだ」と居直れるのである。

4. うそをつく方が善いばあい

真実を解明し、勇気をもってこれを発言していくことは、大切な倫理的態度となる。だが、ときに、真実がひとを傷つける意味しかもたないばあいがある。そういうときでも、やはり、真実は守り発言されねばならないというひともいる。しかし、おそらくは、ひとを傷つけるのみの真実は、黙秘してそっとしておくべきで、必要なら隠されてよいのではないか。ここでは、沈黙が徳となり、隠すことが徳となるのではないかと思われる。

真実は、実践的な真理であるから、それを知ったひとに対してなんらかの影響をもたらすのがふつうであろう。真実に基づいて、行動を決定する場合と、そうでなく、うそやでたらめに依拠してという場合では、真実によっているものの方が一般的にはうまくいくことであろう。しかし、真実がそれを知ったひとに否定的な作用しかしない場合がありうる。それは、たとえば昔話では、「見るな」「語るな」の話といわれるものにあげられている。「鶴女房」とか「へび婿」は、自身の真実の姿は見てくれるなというのであるが、その禁止の願いはやぶられてしまい、真実を知ってしまうことで、一家は不幸になってしまうのであった。これは、現実でもあることであろう。夫の過去を知ってしまい、妻の過去を知ってしまい、これにこだわって、離婚騒動をひき起こしたというような話は、掃いてすてるほどある。知らなければ何も問題は生じないのであり、知ったからといって、なんのプラスにもならないのに、ひとは、秘密があるとなると、これに無知にとどまることは、つらく、不幸をまねくことになるかもと思いつつも、ついつい覗き見てしまう。

しかし、こういう場合、真実を知ること自体は、いいことなのだが、それへの後の対応の仕方がまずいのだと考えられなくもない。末期がんの告知について、わが国では最近までは、そっとしておいて、無知のままに、安らかに死んでいく方がいいといわれていたが、だんだんと、告知して、ショックを克服しがんと闘い、あるいは、静かに受け入れていく姿勢をもって死と積極的に向き合って最期を向かえる方を選ぶというようなことになりつつある。がんという真実に対して、これを隠すのではなく、真実をしっかりうけとめる方がよい、やはり、真実そのものは、大切にしなくてはならないと。隠したりせず、真実をふまえていけば、ホモ・サピエンスであれば、うまくやっていけるということであろうか。

いざなぎが黄泉の国にいき、亡妻いざなみの真実のすがたとしての、うじ虫のわいた腐敗した死体をみてしまったというような場合でも、真実を知る方がいいのだろうか。愛する者のおぞましい腐乱死体をわざわざ見るよりは、これを強いて見知ることなく、美しい思い出のままにしておく方がいいのではないか。また、知られる方からいうと、これは、堪え難い屈辱となりかねないのでもある。諸種のプライバシーは、知ったからといって、有益な情報となるものでもなかろう。それを知られる方は、他人にはどうでもよいことでも、ひとには知られたくない大変な情報なのであり、あばかれることで傷つくのだとしたら、それは、そっとしておくべきではないだろうか。そんな些細なものは、真実の名にあたいしないということになるかもしれないが、当人には重大な事実であり、隠しておきたいものであり、それは、やはり、当人たちには暴かれたくない「真実」なのである。

戦争では、自分たちの状況等について、敵に対して真実を話す者など、裏切り者の汚名を着せ

られることになる。拷問にかけられても、真実を話さなかったということが誇りとなる。真実は、もともと隠されていることが多く、しかるべき者に対しては、しっかりと隠しつづけられることが善となるのである。

カント「虚言論文」(I.Kant；Ueber ein vermeintes Recht aus Menschenliebe zu luegen.1797)は、そういう場合でも、真実を語ることは善なのだから、たとえ殺人鬼に対してであっても、殺そうという人の家をたずねられたら、本当のことを語るべきだという。真実は語って、かつ、悪となる殺人行為などを阻止するつぎの善を求めていくということであろう。それができる状況なのであれば、「真実を語って、つぎに、」といけるだろうが、そうではないのがふつうである。その場合には、些細な真実を語るという小さな「善」によって、大きな悪が必然的にもたらされるのである。カントのように、真実を語ることは絶対的に善だから無条件に語らねばならないというのは、「木を見て、森を見ない」主張だと批判しなくてはならないであろう。

真実を語ることを停止し、隠し立てておくことが有益なものをもたらすのであれば、多分そうすることが道徳的な善行為となる。こういう場合、積極的には、うそをつくことが善になるということである。うそは、どんなものでも、相手の信頼・信用をうらぎるのだから(つまり、うそはこれを信用して真実と受け取られてはじめてうそとして生きる)、そのかぎりでは、どんなによい有益なうそでも、悪の側面をもつのではあるが、大きな悪をふせぐための些細な悪として位置付けられるなら、そのうそは、良いうそだということができよう。

Notluege(苦しまぎれのうそ)という言葉がドイツ語にはある。必要(Not)に迫られての、やむをえないうそ(Luege)ということである。それは、一方では、主張を首尾一貫したものとするために、そのうその部分のみは、しかたなしに、真実からはずれてということであり、あるいは、うそをさらなるうそでかためるという悪のうわぬりであったりする。しかし、他方では、末期がんの告知の回避のように、相手のためを思って、真実は知らさない方がよいとの配慮のもとで、まよいながら、苦慮しながら、やむをえず、うそをつくということもある。沈黙することで、隠していることが分かると、その空白について否定的な想像に終始することになるから、その部分を善意からするうそで埋めることは、そういう相手のために使ううそは、有益なものになるのだといってよいであろう。

もっと積極的には Nutzluege(有益なうそ)がいわれる。そのうそによって、幸福がもたらされたり維持されるのであれば、真実を語って絶望させ不幸をまねくよりは、うそをこそ採用すべきであろう。敵対的状況では、敵にうそをつくことは、敵をあざむき陥れて、しばしば味方を有利にする。逆に、味方の秘密・真実をもらすことは、重大な犯罪となる。あるいは、強盗にレイプされて生まれたのがそのひとの出生の真実だったとしても、そうではなく、戦死した愛するひとの忘れがたみだとでも、うそをつかれた方がよほど気がやすまることであろう。真実を知ったからといって、少しも益するものはないのである。うそも方便である。

教会の銀の食器とか燭台をぬすんだ泥棒がつかまったが、僧侶は、それを、「与えたのです」とうそをついて、この泥棒をすくい、これを改心させていったというような話がある。うそも、使い方しだいでは、真実以上に有益なことをなしとげることができる。うそによって、そのどろぼうは、人生をやりなおす機会をあたえられたのである。冷たい真実のことばではなく、あたたかいすべてを包み込むような大きな愛のあかしとしての「うそ」がかれを救済したのである。こんな話もある。とあるローマ皇帝が一市民になぐられるということがあった。しかし、あとで、かれは、なぐられたことはないとうそをついて、その市民の生命を救ったという。有能な独裁者

は、しばしば、自分への無謀な非難のことばを知らないですませたり、聞いても聞かなかったとうそをついて、自分の権力からの災難がかれらに及ぶ事を寛大にも避けようとした。うそも方便である。

うそは、反真実として、その表象がそれの指示する対象に「不一致」の状態であって、そのかぎりでは、知るということ、認識ということでは、まったく無価値、あるいは反価値でしかない。しかし、そのことの真実を知ることが、ひとにとって、マイナスのものになる場合は、真実は、ひとをきずつけるものとなり、逆に、真実をかくすこと、したがって、うそをつくことは、ひとを安堵させたり幸福をまもるといった善になりうるのである。うそは、つねに悪であるわけではない。

5.虚構など

うそは、さらに尊ばれる場面をもつ。それは、いわゆるフィクションの世界を豊かにするものとしてである。フィクションの世界は、この現実からまるっきり離れて、無関係のものになっているのでは、ひとの関心をよぶことが難しくなる。それがひとの関心をよび、充実感をあたえてくれるのは、あたかも、真実・事実であるかのようなよそおいをもってのことである。つまりは、現実世界に即しつつ、現実であるかのように見せかけ、真にせまるものでありつつ、そのようなことは事実としては存在せず虚であるという、「うそ」で構成することによってであろう(もちろん小説などは、その根本において、人の生の深い真実をとらえていることがひとを引き付けて感動させるのでもある。小説のフィクション・うそは、個別的具体的な事実としては、これに対応するものがなく、「うそ」をかたっている。しかし、それだけのことなら、ひとをひきつけることはない。その個別の仮象をかたることを通して、この世界の深い普遍的な真実を描き出しているのであり、この真実に引き付けられるのであろう)。うそは、つねに、真実という見せかけをもつ。それがなくては、うそとしては、意味がなくなってしまう。フィクションに遊ぶ者は、手に汗をにぎり真に迫るものをと、上手な「うそ」をもとめているのである。ただ、ふつうのうそとちがって、根本的には、うそであることを、うそをつかれる方がしっかりふまえているし、うそでなくてはならないのである。ジェットコースターは、真実、墜落したり、転覆してくれたのでは、こまる。うそと確信できているから、これを楽しめるのである。ここでは、だまされるものがわれわれのうちの何であるのかが問題になる。遊園地でだまされるのは、身近かの個別的現実に対応した肉体・感覚であり、全体をとらえ普遍・本質を知る知的な精神は、その遊びが「うそ」であることを了解しており、だまされてはいないのであろう。そのだまされていない意識がうそだと安心できているから、遊具に身をまかせられるのである(ここでは、うそに対立しているのは、真実ではなく、単なる事実であるが)。

フィクションの世界は、基本的に「うそ」でもって成り立っている世界であるが、そのなかでも、狭義に、本当の「うそ」がもてあそばれる場合がある。「ほらふき男爵」などの話がそうであり、「うそつき大会」「ほらふき大会」がそうである。ふつうのフィクションでは、現実味・真実味をもっている「うそ」が語られるのであり、これを楽しむものは、それを現実・真実と感じることになる。だが、「ほらふき大会」でのうそは、現実世界を前提にしながら、これからどれほど大きく離れてうそをつけるかを競うのである。生活のなかのうそは、しばしば私利私欲のために真実を隠して人をだまそうというもので、うそは、よごれている。だが、嘘つき大会のそれは、これとは全く異なる。利害を離れて、真実であれば大変なことであろうようなものを創作し、

巧みなうそを競うのである。現実味をうしなうことがないぎりぎりのところまで現実を離れて、どれだけ飛翔できるかを楽しむものであろう。

数などの理念世界もまた、ある種の「うそ」の世界であろう。数的世界が、実在世界の深い真実の一面をとらえた理念世界ということであれば、その限りでは実在世界に一致した真実となるが、理念世界は、かならずしも実在世界に一致しない。理念世界に固有の法則・規則のみでもって展開のなるときには、しばしば実在世界からいうと空理空論となっていて、実在に不一致となる。いわば、うその世界となる。数的な理念世界では、20 たす 30 は、50 になるが、実在世界では、かならずしも、そうはならない。20 度の水に、30 度の水をたしたら、50 度のお湯になるというほど、実在世界はあまくない。数的理念界では、50 になるのが真理であるが、実在世界との一致・不一致ということになると、これは、一種の「うそ」になる。ただし、その「うそ」は、実在世界とは別の世界であることを指し示すのみのことで、理念世界にとっては無効であるわけではない。この「うそ」・空想・抽象の世界は、それはそれで、純粋にその理念のみの展開でなるものを語っているのであり、意味深い「うそ」なのである。

6. うそと真実の背くらべ

うそは、真実と同じ顔をしている。うそつきは、うそを真実として提示しているのであり、これにだまされるひとは、それを真実とみなしている。うそつきは、真実を知っているのがふつうである。そのうえで、真実を参考にしながら、これに見劣りがしないような、しばしば真実以上に真実らしい、うそを創作する。

うそも真実も、事実を前提にして、これから離れている観念的なものである点では、無区別である。同じように、肝心要めのものとして、抽象されて成立したものという姿をとるイデアールな観念的なものである。見かけからは、両者には区別はない。だが、根本的に対立したものである。真実の観念は、問題となる事柄・対象に一致したものであり、真実は、対象世界の本質をなすものとして、その世界に多様にかかわって、その多様な事実につきあわせて矛盾するところがないのみか、事実につきあわせればあわせるほど、それが真実であることの確信を強くしていけるはずである。しかし、うそは、反対である。対象に不一致の観念であり、対象世界の事実にふれればふれるほど、不一致は明瞭になって、それがうそであることが暴露されやすくなる。その世界の展開のなかにおかれるかぎり、いずれは、不一致・矛盾の顕在化は避けられず、うそであることが判明していくことになる。真実もうそも、観念的なもので、単なる表面的な事実からは離れているものだが、真実は、対象に内在したその内的本質を構成するのに対して、うそは、対象から浮いていて、いわば、単に超越的に対象世界のそとに観念として存在しうるのみである。

ただし、ひとが敵対しているところでは、しばしば真実の理解も敵対的となり、自分の真実は、相手からは「うそ」と規定されやすくなる。真実は、単なる真理ではなく、主体的な実践的なものとして存立しているから、その主体のあり方に応じては、反対から見て、反対にかかわりをもつような場面になると、真実は、別々となることが可能だと言ってよいかもしれない。真実は、ひとつといわれる。同じところから、同じ関心から見た真実は、ひとつであろうが、別の方向からみた真実は、別々であってよいであろう。そういう場合は、自分たちの真実は、敵からみると、うそであり、敵の真実は、自分たちには、うそとなる。神の存在や天動説は、今日の常識から一般的にいえば「うそ」になろうが、これを語る本人の主観においては、確かに神が目の前に現われて(幻覚であったとしても)存在していたのかもしれないし、感覚的には太陽が天が動いている

のは確かであり真実であろう。「殺人の事実」は、一致するが、真実の意味は被害者と加害者では、おそらくは一致しない。被害者の方からは、加害者の粗暴性が真実としてあげられ、加害者の方からは、被害者の非情さ・無神経のあげられるようなことがある。そして、いずれもが、それをうそだと反論しうる。この場合は、いずれもが、真実とは、ほど遠い主張をしているのかもしれないし、あるいは、両方の真実は、真実の一面であり、それを総合した全体が真実だということも可能であろう。

真実とうそは、それ自身を見るかぎりでは、同じ姿をしていて、うそとも真実とも判別しがたい。それのちがいは、根本的には、それが表わしているもとの対象の本質に、それが一致しているのか否かということにあり、この一致・不一致を検証していくことで、真実とうそは、まるで反対のものとなって、あらわれてくる。

「つじつまがあっているのかどうか」検証するといわれるが、根本的には、対象そのものに一致していることが「つじつまがあう」ということになる。対象世界の展開のなかにその真実なるものをおいて見て、諸事実とうまく合致しているかどうかということである。さらに、真実かどうかの傍証としては、形式的には、論理的な整合性、合理性を「つじつま」があっていることで問題とすることもある。その発言が前後で矛盾しているとしたら、どちらかは誤っているわけであり、いい加減さがそれで見て取れることになる。とはいえ、矛盾した表現を見つけたとしても、それは、真実そのものをうまく表現していないだけで、その主張がそれだけでうそだということにはならない。むしろ、うそつきは、そういう形式的な整合性には人一倍気をつかっているから、論理的につじつまがあわないというような事は少ないのに対して、真実のひとは、表現よりは、ことがらそのものの真実を気にしているから、表現は稚拙でその点でのつじつまあわせなどのひまがないというようなこともある。また、真実の世界は、多様であり、抽象した場合、一面的になり、真実をと思うひとは、一面的な断言はさけて、「夕日は、赤い」し「赤くない」と矛盾したことを言いがちでもある。対象世界とその諸事実にかかわってつじつまがあっているか否かということが、つまり対象世界とそれを指し示す表象との一致が、真実とうその判別の根本的な基準である。

さらに、やはり、傍証にすぎないが、その発言者が信頼できるひとであるのか、うそつきであるのかということも、大切な基準となる。「信頼できる筋からの情報」という。信頼できる報道機関からの発表なら、おおむね、批判的に見る手間を省略して、真実だとうけいれることであろう。だが、日頃、いい加減でうそをしばしばつく者のいう「真実」に対しては、当然、疑問をもたざるをえず、そのときの発言について信用・信頼できるのかどうかと検証することになる。

信頼性を高めるには、より多くの情報源をもって確かめる手がしばしば使われる。ほかの人とか、別の資料なり、別の情報の入手ルートで(感覚的なものなら、耳のみではなく、眼でも)確かめるのである。また、うそをつく必要性のあることがらなのかどうかということも調査するべきであろう。うそをつくより、真実をいう方がそこでは得になっているのだとしたら、うそつきであっても、利害関係からは、真実を発言することになるはずである。あるいは、日ごろから、不利になっても真実を言うようなひとの場合、そのことについて、ふつう以上によく見える立場にいて、その情報の入手経路がまちがいのないものなら、当然、非常に信頼性の高い情報源となることであろう。

J.S.ミル(『自由論(On Liberty)』)は、真理の把握のための前提条件として、どんなに確かと思われているようなものでも誤りうること、つまり可謬性(fallibility)をふまえ、徹底的な自

由な討論などの保障をもとめ(cf."Collected Works of John Stuart Mill". University of Toronto Press. 1977. Vol.18. p.229ff.)、場合によっては「悪魔の代弁者(devil's advocate)」をたてるべきことをいう(ibid. p.232,245.)。「悪魔の代弁者」とは、キリスト教で、聖者として認知する場合、当人を徹底的な(いわば悪魔的な)批判にさらし、これに耐えうるもののみを聖者とするというようなときにつかわれたもののようで、ミルは、真理・真実に、この「悪魔の代弁者」をあげて、悪意にみちた反対者の批判をもしっかりうけとめることができなくてはならないというのである。真実のためには、うそ・誤りの可能性が残る限り、徹底的にたたかれねばならないのである。

こうして得た真実度の高い情報は、だが、真実度の低いものよりも常に優先されるとはかぎらない。その真実の内容そのものの重要度というものがある。主体的実践的な真実であればこそ、実践的に人間的に果たすものがどういうものなのかが問題となる。いくら確かな真実だとしても、「水道の水は、美味しくない」というありふれた真実には、だれもが納得していたとしても、耳をかたむけるものはいない。だが、真実ではなかろう、うそにきまっていると思っても、「水源地に毒がいれられた」といううわさ話には、おそらく、みんな関心をもたざるをえない。実践的に無意味・無価値なものは、確かな真実であっても、その実践的な重要性ということから、無視され、実践的関心からいって問題となるような「うそ」は、真実の可能性を否定できないかぎり、注目されることになるわけである。

7.むすび(うそと真実の弁証法)

真実とうそは、いずれが有益かは、分からないこともあるのだが、うそと真実は、実は、どちらが真実でどちらがうそかも、不分明で相対的なものであることも、しばしばである。真理と誤謬とちがって、真実とうそは、人間的なことがらに属していて実践的主体的な場面にいわれるものであり、利害対立のあるところでは、自分のいう真実は、相手にはうそで、相手の主張する真実は、自分から見ると敵対的な悪意をもっての妨害という評価から、単なる「誤り」ではなく、「うそ」ということになりうる。うそは、真実をよそおい、真実として自己主張する。はじめから嘘と分かっているものは、通用しない。真実らしさを持っていて真実として通用してはじめて、生きたうそになる。

真か虚偽かは、もとの対象への一致と不一致のちがいであるが、この世界では、一致・不一致は、この二極に明確に別れるのみではない。一致とも不一致ともつかないものが存在しうる。人間的な世界では、黒か白かにと決着をつけることができないものがある。つまり、真実ともうそとも言い切れない曖昧な領域をもつ。あとは、これを受け取る当人の好みによる選択になることがある。そして、好みによって選んだ、灰色の真とも偽ともつかないものがそのひとをよりよく導いていけるならば、真実に似た効力をもつ。たくさんの選択肢のなかから、これこそが「本ものだ」「真実の理想だ」と自分にとっての真実になるものを選ぶのであり、一番はずれていると思うものに虚妄というレッテルを貼るのである。

ただし、うそとは言っても、うそつきのうそと、真実を求めているもののうそは、これをしっかりと区別しなくてはならないであろう。うそつきは、はじめから、反真実をもって自分の利益のためにひとをだまし陥れようとするものである。だが、真実を求めているもののうそは、他の者からみてそうであるのみであって、当人としては、真実そのものを追求しているのである。真摯であり、うそをつくつもりはない。

仏教は、多くの流派にわかれているが、好みにあった自分の宗派の仏教は、真実の教えであるということになる。そして、他の宗派のものは、「方便」で、その修行も「雑行」などと位置付けられる。他宗派は、ほんものではなく、にせもの・まがいものであり、うその教えになる。だが、それでも、他宗派のものを全面的に排斥して邪宗と排撃することは、かならずしも多くはない。一歩足りないもの、不十分なものとして、仮のもの、雑行にとどまるものとして、謙虚に、承認はしていく。ここでは、真実は、うそと並び立つということができる。自分の宗派は、真実の教えである。だが、他宗派は、うその教えになるが、それも、方便の教え・仮りの教えとして、まがいものではあるが、承認はできるということである。浄土宗系の場合はとくに謙虚であって、愚かしい自分には、称名念仏という易行による以外には救われようがなく、これが真実の教えだが、修行してしっかりやっていけるひとには別の聖道門があるという。自分には浄土の教えが真実だが、立派な賢者には、別のむずかしい教えが真実でありうると考えているのである。ということは、賢者の真実の教えからいうと、自分たち劣機のものの教えは、うそ・方便だと認めているのでもある。真実とうそは、ひと次第で、うそとも真実ともなり、真実とうそは、ここでは順位のちがいをもって、あい並び立つものになっているといえよう。親鸞は、浄土の真実の教えを求めて、後世、浄土真宗の開祖とされていったひとだが、『歎異抄』によると、かれは、自分の信じる教えは、うそかもしれない、師の法然にだまされているのかもしれないとさえいう。そして、それでもいいのだ、愚かしい自分は、立派な修行をして悟る事などできない身であり、地獄へいく以外ない身なのだから、だまされていたとしても、それ以外に自分にとっての真実の教えはないのだと述懐している。

宗教は、信仰をもってするもので、信じることが肝要である。信じるとは、知的なせんさく・懐疑を停止し、与えられた主張・真実といわれるものを、そのままにまるのまま素直に受け入れることである。真理・真実は、知的ないとなみのもとにあるのだが、宗教は、この知の働きをいわば信というマヒ剤によってマヒさせ停止させるのであり、うそであっても、無批判に受け入れていくことになる。知的な批判精神を停止して、信じこむということだから、信仰される事柄については、うそが堂々とまかりとおる(もちろん、うそだから駄目だということにはならない。人知ではどうしようもない絶望を救うものは、おそらくは「うそ」である。尊いうそが、どれだけ苦悶の人生からひとを救ったことか)。ただし、他宗に対しては、常識的な知的な批判のまなこをもってするので、うそをうそと批判できる。宗教のあいだでの批判においては、自宗に関してはうそ・でたらめに固執しているにもかかわらず、他宗の批判はしばしば鋭く真実を暴露しているものである。

平成 12 年 10 月

『ぷらくしす』(広島大学文学部倫理学教室・西日本応用倫理学研究会) 2000 年秋号 1~21 頁